

まえがき

1970年代に新自由主義的社会経済関係のグローバル化が緒についたとされる。この世界的趨勢を受けて「ポピュリズムのグローバル化」も起こっている。これは形態と運動を、あるいは理念を異にしつつも、南欧と北欧の政党制の変容に、また、米国のトランプ政権の成立にも認め得ることであるし、イギリスのEU離脱（「ブレグジット」）もポピュリズムの潮流において捉えられている。そして、今年（2017年）にはオランダの総選挙を皮切りにフランスの大統領選とドイツの連邦議会選が予定されている。この一連の選挙においてもポピュリスト政党の躍進が予測されている。すると、かつては、「ポピュリズム」という言葉は中南米諸国の権威主義的開発国家と結びつけて使われる場合が多かったが、今や、この地域に限らず、東南アジアやアフリカを含めて広く適用されるに及び、「ポピュリズムの時代」であるとすら呼ばれている。本書は、こうした世界を席卷しているポピュリズムの動態の分析と理論化を課題とし3部から構成され、12本の論文と2つのコラムを収めている。

「民主主義」の理念と運動は「修辞」性を帯びるだけに、常に、多義性を宿すことになるし、その運動も多岐化せざるを得ない。この点は「ポピュリズム」にも妥当することである。とりわけ、今日のポピュリズム（「ネオポピュリズム」）が「グローバル化」状況を背景としているだけに、その性格を強くせざるを得ない。これは「ポピュリズム」という言葉が分析概念というより、分析対象であることによる。第I部（「ポピュリズムとは何か」）の2つの論文（第1・2章）がポピュリズム概念の系譜学的検討を踏まえて、民主政の視点から、その含意の分析を試みているのも、そのためである。

第II部（「ポピュリズムと民主主義の危機」）は個別「国家」を異にしつつも、主として、資本主義国の新自由主義的社會經濟の再編過程と政党制の変容という視点からポピュリズムの実態を分析する5本の論文を収めている。いずれもポピュリズム運動の歴史的経緯と「国民国家」の組成を、また、社会経済の構

造と国際環境の変化を踏まえてポピュリズムを分析するとともに、この運動と理念を「民主主義」の視点から問うという点では課題を共通にしている。これは、第3章のイタリアの、また、第4章のフランスの論述に認め得ることである。この視点は西欧北西圏のベルギーと北欧諸国のポピュリズム分析にも共有されており、第5章では多言語・多民族国家の「合意型民主主義」体制におけるポピュリズムの台頭について論じ、第6章では北欧のポピュリズム分析の視座を設定したうえで、デンマーク、ノルウェー、スウェーデンを事例としつつポピュリズムを比較分析している。そして、ポピュリズムが移民問題をひとつの共通の政策としているだけに、「排除と包摂」の言説が分析の対象とならざるを得ない。この点とかかわって、第7章はアメリカにおける「非合法移民」と国境管理政策を踏まえて、この「移民の国」における「人民」の言説をネイティヴィズムと結びつけて論述している。

第Ⅱ部が自由民主的國家におけるポピュリズムの分析を主軸としているのにたいし、第Ⅲ部（「民主化とポピュリズムの台頭」）は体制転換を経た、ないし、その過程にある諸国のポピュリズムを対象としている。すなわち、第8章はロシア政治史を踏まえてポピュリズム現象が国内的・国際的危機と強固なナショナリズムに支えられた「強い国家」の構築という課題を背景としていることを明らかにしている。そして、第9章はラテンアメリカのポピュリズムをペルー、ベネズエラ、エクアドルについて検討したうえで、「新自由主義型ネオポピュリズム」と「急進的ポピュリズム」とに類別し、さらには、ポピュリズムと民主主義との緊張関係の指摘に及んでいる。また、第10章と11章は東南アジアを対象とし、第10章は「権威主義体制」後の民主化の過程にあるフィリピンとタイという2国のポピュリズムに注目し、社会的「包摂」という視点から両国における民主化の契機を指摘し、第11章はインドネシア・バリ州に焦点を据え、観光開発をめぐる統合と分離との対抗関係においてポピュリズムについて検討している。そして、「おわり」にあたる終章では、日本のポピュリズムの「基層」を明らかにすることを試みている。なお、2つの長文のコラムは、ポピュリズムの理念的位置と政治的土壌を明示している点で、また、「ダーイシュ現象」に「オリエンタリズムの言説」と「ある種のシステム」を読み取っ

ている点で示唆的でもある。

以上のごく短い紹介からもうかがい得るように、本書はポピュリズムの分析視座を提示するとともに、そのグローバル・シンドローム化を個別の「国家」ないし「地域」における発現形態について検討していると言える。研究領域と分析概念を異にしているだけに、論述が必ずしも体系的に構成されているとは言えないが、これはポピュリズム現象を多角的に照射しようとする意図に負うことである。また、いずれの論文もポピュリズムの理念と運動の多様性に両義性を認めている。これは、ポピュリズムが民主主義の現代的課題を提起していることの反映でもある。

確かに、ドイツとイギリスやオーストリアの、あるいは、スイスとオーストラリアなどのポピュリズム分析を欠いているという難点を留めている。これは適切な執筆者を得ることができなかったことによる。だが、本書の行論には、グローバルな徴候とされるポピュリズム概念の検討を起点とし、体制を異にする国家と地域について、その動態を個別に分析することでポピュリズムに民主主義の現代的課題を読み取ろうとする意識が底流している。以上に鑑みると、本書はポピュリズムの理念と実態の分析の書であると言える。それだけに、今後のポピュリズム研究の地平を拓くための“たたき台”となり得ることを期待している。

2017年1月20日

編者一同